



# 斎藤茂吉

本林勝夫 著

短歌シリーズ・人と作品 12

---



本林勝夫（もとばやし・かつお）

大正8年9月18日、金沢市に生まれる。昭和22年、東北帝国大学法文学部（国文学科）卒業。昭和27年、東北大学文学部大学院修了。近代日本文学専攻。現在共立女子大学文芸学部教授。著書「現代短歌」（学燈社）、「斎藤茂吉論」（角川書店）、「斎藤茂吉 〔近代文学注釈大系〕」（有精堂）、「斎藤茂吉集・注釈 〔日本近代文学大系〕」（角川書店）、「近代短歌講義」（共著、桜楓社）、「現代短歌を学ぶ」（共編、有斐閣）など。

短歌シリーズ 12  
人と作品

斎藤茂吉

昭和五十五年六月五日 初版発行  
平成三年九月二日 四版発行

定価は函に表示してあります。

著者 本林勝夫

発行者 坂倉良一

印刷所 共信社印刷所

発行所 株式会社 桜楓社

東京都千代田区猿樂町一―三―一

電話 三二九五―八七二（代）  
振替 東京六一―八〇二〇

ISBN4-273-00513-1  
Printed in Japan

検印省略

目

次

序

作家研究編

|   |                            |    |
|---|----------------------------|----|
| 一 | 幼・少年期―金瓶時代―……………           | 九  |
|   | 「抜刀隊」の歌……………金瓶……………        | 一〇 |
|   | 幼・少年期……………上京……………          | 二三 |
| 二 | 中学・高校時代―「竹の里歌」との邂逅まで―…………… | 二七 |
|   | 浅草東三筋町……………開成中学……………       | 三三 |
|   | 露伴文学との接触……………最初期の歌……………    | 三八 |
|   | 日露戦争前後……………「竹の里歌」との邂逅…………… | 四四 |
| 三 | 歌人的自己形成―「赤光」時代―……………       | 四九 |
|   | 左千夫入門前後……………習作期の歌……………     | 五五 |
|   | 左千夫との対立……………「赤光」最末年……………   | 六六 |
| 四 | 大正初期―「あらたま」時代―……………        | 七四 |
|   | 結婚前後……………「アララギ」の転換……………    | 八四 |
|   | 大正五年前後……………                | 八四 |

五 大正中期―「つゆじも」時代―……………九二

写生説の成立…九  
「つゆじも」の歌境…五

六 在欧時代―「遠遊」「遍歴」……………一〇〇

ウィーン時代…一〇〇 ミュンヘン時代以後…一〇五

七 火難時代と轉換期の「アララギ」―「ともしび」の時代―……………一二四

火難…一二四 赤彦の死とアララギの轉換期…二九 赤彦から茂吉へ…二三 青山脳病院長と龍之介・千樫の死…二五  
模倣餓鬼論争・養父の死…二三

八 昭和前期―「たかはら」「連山」「石泉」……………一二三

対水穂論争と「アララギ」の安定…二三 生活身边と歌風の沈潜化…二五

九 昭和十年前後―「白桃」「晩紅」「寒雲」……………一四三

「白桃」前期…四三 上ノ山滞在吟前後…四五 「晩紅」の歌…五〇 「寒雲」時代の歌…五五

十 茂吉短歌の極北―「小園」「白き山」……………一六〇

十年代後半期…二六 歌集「小園」末一年…二五 「白き山」

の世界…二七

十一 最晩年―「つきかげ」―……………二八

掃京当時…二九 戦後「アララギ」と茂吉…二八 終焉…二四

## 秀歌鑑賞編

- |              |       |             |      |
|--------------|-------|-------------|------|
| はるばると母は戦を    | (二九)  | たまきはる命ひかりて  | (二六) |
| 飯の中ゆとろと上る    | (九四)  | 死に近き母に添寝の   | (二七) |
| 月落ちてさ夜ほの暗く   | (九五)  | のど赤き玄鳥ふたつ   | (二八) |
| 萱さうの小さき萌を    | (九六)  | 山ゆゑに笹竹の子を   | (二九) |
| とはき世のかりようびんが | (九七)  | めん雞ら砂あび居たれ  | (三〇) |
| 青山の町蔭の田の     | (九八)  | ふり灑ぐあまつひかりに | (三一) |
| 赤茄子の腐れてゐたる   | (九九)  | あかあかと一本の道   | (三二) |
| ひとり居て朝の飯食む   | (一〇〇) | ほのぼのと諸国修行に  | (三三) |
| 萱草をかなしと見つる   | (一〇一) | 足乳根の母に連れられ  | (三四) |
| あはれなる百日紅の    | (一〇二) | 草づたふ朝の螢よ    | (三五) |
| 土のうへに赤棟蛇遊ばず  | (一〇三) | 山峽に朝なゆふなに   | (三六) |
| 夜くればさ夜床に寝し   | (一〇四) | ゆふされば大根の葉に  | (三七) |
| うれひつつ去にし子ゆゑに | (一〇五) | いばらきの濱街道に   | (三八) |

ものの行とどまらめやも (三九)

きのこ汁くひつもおもふ (三〇)

ふるさとの蔵の白かべに (三一)

こもらへば裏町どほりの (三二)

電燈の光とどかぬ (三三)

かみな月十日山べを (三四)

あはれあはれこは肥前の (三五)

朝あけて船より鳴れる (三六)

あそぶごと雲のうごける (三七)

あまつ日は松の木原の (三八)

空のはてながき餘光を (三九)

こほりつつ流るるにかあらし (四〇)

この城に入りて聯想の (四一)

ヴェネチアの夜のふけぬれば (四二)

はるかなる国とおもふに (四三)

現身のはてなき旅の (四四)

平らなるこの国の上に (四五)

汗にあえつつわれは思へり (四六)

とどろきてすさまじき火を (四七)

かへりこし家にあかつきの (四八)

家いでてわれは来しとき (四九)

焼けあとに新しき家 (四〇)

はしけやしこの身なげきて (四一)

このみ寺に仲時の軍 (四二)

さ夜ふけて慈悲心鳥の (四三)

うごきぬし夜のしら雲の (四四)

しづかなる峠をのぼり (四五)

ひる過ぎてくもれる空と (四六)

湯のなかに青く浮かしし (四七)

壁に来て草かげろふは (四八)

石原の湧きいでし湯に (四九)

はかなごとわれは思へり (五〇)

直ぐ目のしたの山嶽より (五一)

石亀の生める卵を (五二)

雪降れる冬野を照らす (五三)

塩負うて城門外に (五四)

ながらへてひとりなりける (五五)

よひ闇のはかなかりける (五六)

本堂の明きにひとつ (五七)

おほつびらに軍服を著て (五八)

過去帳を繰るがごとくに (五九)

押入にひそむこの子よ (六〇)



あまのはら見る見るうちに (二六二)  
 ただひとつ惜しみて置きし (二六三)  
 あはれあはれ電のごとくに (二六四)  
 いとけなかりし吾を思へば (二六五)  
 うづくまるとく籠りて (二六六)  
 うつつなるこの世のうちに (二六七)  
 紀伊の海の塩気のけむり (二六八)  
 横ぐもをすでにとほりて (二六九)  
 たらちねの母のゆくへを (二七〇)  
 大股に歩ける人の (二七一)  
 とことはに寂しきものか (二七二)  
 ガレージヘトラックひとつ (二七三)  
 「陣歿したる大学生等の (二七四)  
 寒くなりしガードのしたに (二七五)  
 青葉くらきその下かげの (二七六)  
 さだかならぬ希望に似たる (二七七)  
 少年ひとり間道を走る (二七八)  
 罪ふかきもののごとくに (二七九)  
 わが側にをとめ来りて (二八〇)  
 クリートに竹梯子見え (二八一)  
 おろかなる日々過ごせども (二八二)

直線に此処を流るる (二八三)  
 洋傘を持てるドン・キホーテは (二八四)  
 赤名越えて布野のはざまに (二八五)  
 萬里紅の鯉を食はむと (二八六)  
 白き餅われは呑みこむ (二八七)  
 わたつみに向ひてゐたる (二八八)  
 櫻桃の花しらじらと (二八九)  
 ためらはむことひとつなし (二九〇)  
 隣り間に噓して居る (二九一)  
 たたかひの劇しきさまに (二九二)  
 秋たちてうすくれなゐの (二九三)  
 ぬばたまの夜はすがらに (二九四)  
 くやしむ言も絶えたり (二九五)  
 くさぐさの實こそこぼるれ (二九六)  
 あかがねの色になりたる (二九七)  
 幻のごとくに病みて (二九八)  
 彼岸に何をもとむる (二九九)  
 近よりてわれは目守らむ (三〇〇)  
 最上川の上空にして (三〇一)  
 最上川逆白波の (三〇二)  
 道のべに苧麻の花 (三〇三)

|             |      |              |      |
|-------------|------|--------------|------|
| 桂樹の秀枝に來り    | (三三) | すでにして現なる世に   | (三八) |
| 鶯ひとつ啼きしばかりと | (三四) | わが生きし嘗ての生も   | (三九) |
| 冬眠より醒めし蛙が   | (三五) | 暁の薄明に死を      | (四〇) |
| 東北の町よりわれは   | (三六) | いつしかも日がしづみゆき | (四一) |
| 浅草の晩春となり    | (三七) |              |      |

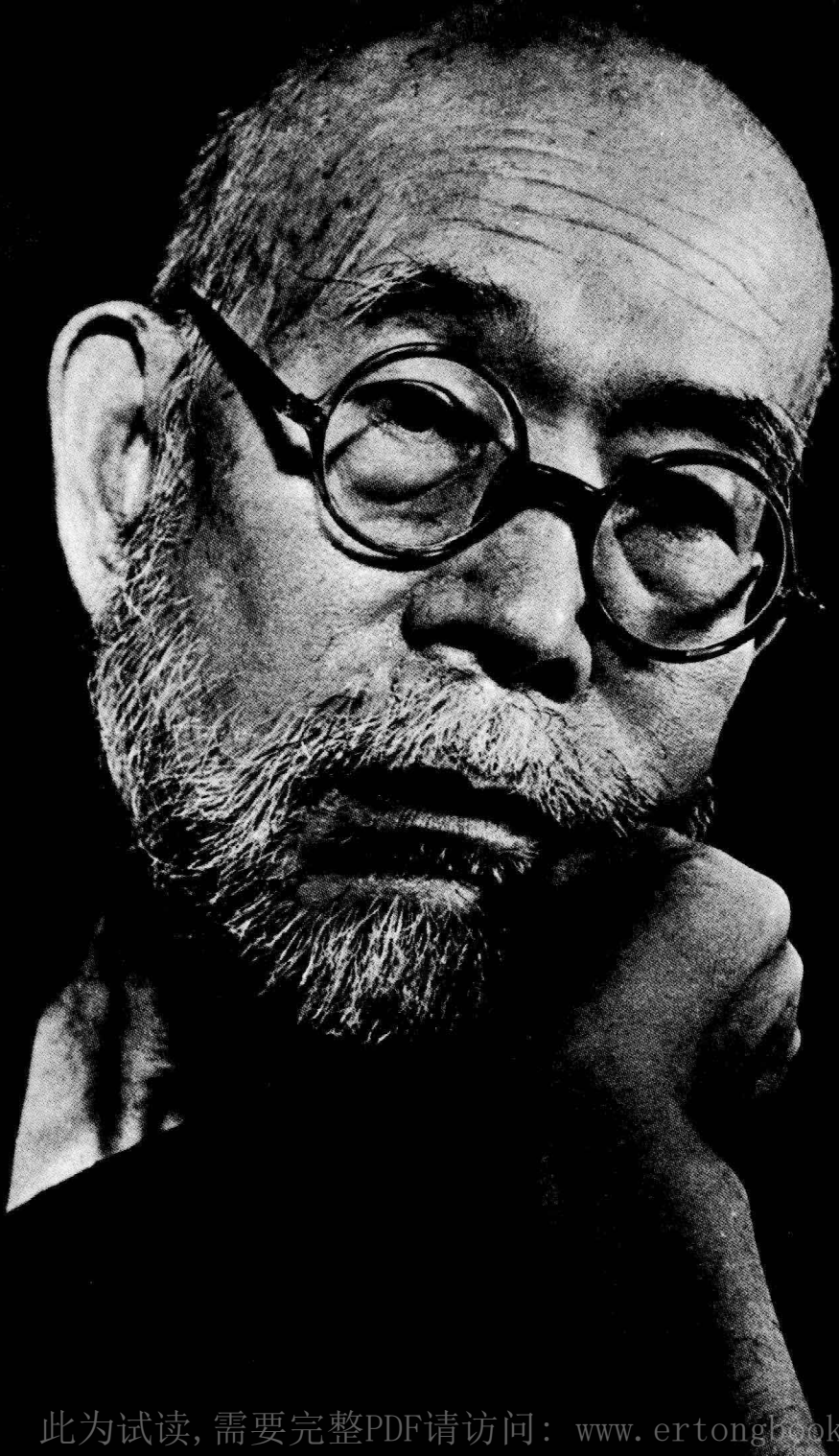
茂吉紀行……………三三

資料・参考文献……………三八

斎藤茂吉略年譜……………三四

短歌索引……………四八

装画 佐藤多持



此为试读, 需要完整PDF请访问: [www.ertongbook.com](http://www.ertongbook.com)

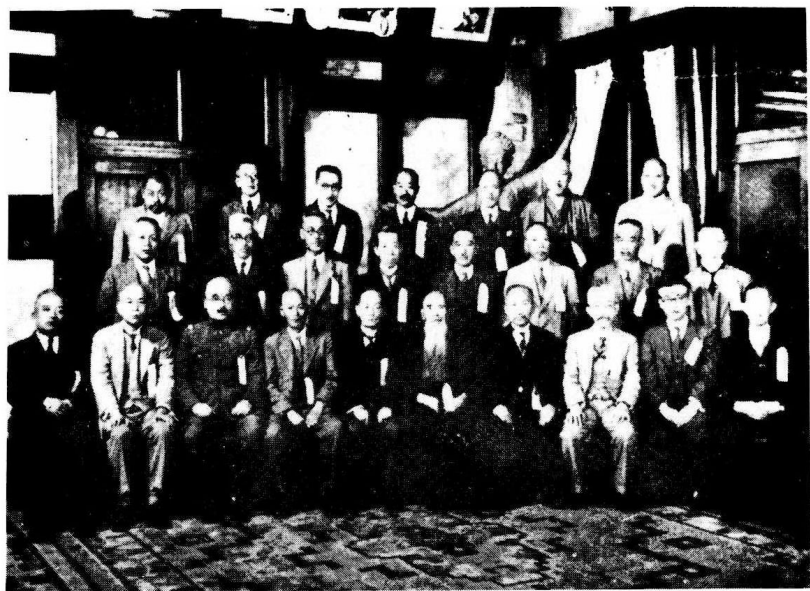


父熊次郎（伝右衛門）と茂吉（十一歳）  
 —上山小学校高等科当時—  
 （黒江太郎氏提供）



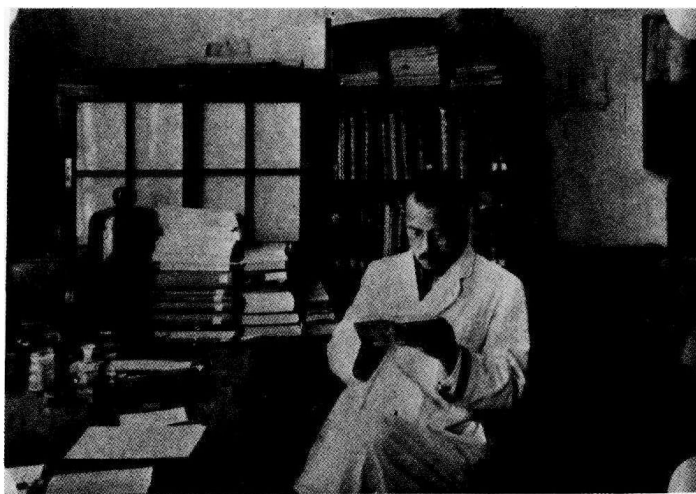
生家守谷家（山形県上市市金瓶北百六十二番地）  
 昭和三十八年当時

表の写真は昭和二十五年当時  
 （田村茂氏撮影）



恩師謝恩開成中学級会（昭13年6月17日）

—前列左より吹田順助・茂吉・小泉親彦。二人おいて橋健三・堀江秀雄先生・菅原教造・村岡典嗣・市来崎慶一。中列左より二人目内田祥三。



長崎時代

—部長室における茂吉—



昭和二十一年最上川畔での茂吉  
(佐々木勇氏撮影)



茂吉記念館

## 序

本書が「短歌シリーズ・人と作品」の一巻として刊行されたのは、昭和三十八年五月であるから既に十七年以前のことになる。その旧版の「はしがき」で私は、斎藤茂吉死去後満十年をすぎたが、「本格的究明が始まったのは、ここ数年来のことと断言していいのではあるまいか」と記した。そして、その「本格的究明」は、ここ二十年近くの間、非常に進展を見せ、小著刊行後も茂吉に関する著述は早くも五十冊を越えようとしており、この間私自身も諸家の驥尾に付して若干の仕事を進めることが出来た。今回、新しい構想のもとに本シリーズが刊行されるに際し、なるべくならその成果を遺憾のない形でとり込みたかったが、諸般の事情から旧版の若干部を訂補するにとどまった。「かくて夕ごとに三十面乃至五十面を通閲し、おほよそ二週が程に業を卒へつ。されば改むべきをも悉くはえ改めず。断つべきを断たざるあり。続ぐべきを続がざるあり。ひたすら行数を増減せんことをのみ恐れつ」(改訂水沫集序)——ここで鵬外の言葉を引くのは不遜のそしりをまぬがれないであろう。しかし、ありようは、こういった次第であり、同時に象嵌校正という制約のもとに可能なかぎり改訂増補版としての実質を備えるように努めたのも事実である。

本書は、もともと私にとっていわゆる若書きの部類に属している。しかし、刊行以来、茂吉を問題整理的に通観した最初の評伝として同情を得、幾度かの版を重ねることが出来た。執筆の際恩頼を蒙った諸家に加えて、ここに大方の読者諸賢に対しても改めて感謝を申し上げたい。なお、今回も口絵写真については藤岡武雄氏の助力を仰いだ。桜楓社編集部は今井肇・丸山かずみ両氏をも含めて御礼申し上げる次第である。

昭和五十五年五月二十日

本 林 勝 夫

本文中の茂吉作品の引用は新版全集に拠るべきだが、校正上の煩雑を避け、すべて従来そのまま旧全集に拠った。また柴生田稔氏『斎藤茂吉伝』、藤岡武雄氏『評伝斎藤茂吉』などその後単行本にまとめられた引用文献も少なくないが、これも初出に拠っていることを付け加えておきたい。



作  
家  
研  
究  
編